

平成23年度修士論文発表会

研究科紹介

研究科卒業生最後の公開発表の場となった「修士論文公開発表会」。会場には担当教員や研究科学生をはじめ、本学の大学生や各学科教員たちも参加。研究発表の際は、同期の学生たちや各学科教員からも質疑応答が飛び出すほど、真剣で有意義な発表会となりました。



理学療法学分野
機能障害・回復学領域
成田秀美(なりたひでみ)さん

発表を終えて

現在、弘前医療福祉大学の教員を務めながら、本学の研究科に通う成田さん。リハビリ作業療法士の資格も所持。その成田さんが本学の研究科でさらなる研究を進めようと考えたのは、体のリハビリだけではなく、心のリハビリの大切さに気づいたからという。今回の発表のテーマは「不安定板上の座位姿勢調節時における二重課題の介入効果について」。

バランスボードによる身体の調整に「仮名文字」の文章理解を付加し、脳を刺激するリハビリ研究の結果発表でした。

今回の発表に際し成田さんは、「担当教員の岩月教授の熱心なサポートには大きな感謝を感じています。

資料はみんなにわかりやすいよう、紙芝居のような図解を用いた視覚に訴える資料づくりを心がけました。

この研究発表をもとに、患者さんがリハビリに対して、楽しく、効果を感じる治療につなげたい。後輩のみなさんも自分の研究に熱い思いを持って頑張ってもらいたい。」と話してくれました。



学科紹介

「看護」とは。今、私が思うこと。

看護学科平成23年度卒業生 熊谷桃子(くまがいももこ)さん

現在、宮城県塩釜市の病院に勤務する熊谷さん。

高校時代、祖父の長期入院を通し、家族として何かできることをしてあげたいという思いから看護を目指したという。熊谷さんが卒業を控えていた頃発生した「東日本大震災」。帰省していた岩手県大船渡市の実家も大きな被害を受け、青森に戻ることができなくなった。先のことが本当に不安だった中、「引越しの手続きなどを友人や看護学科の先生方がすべて対応してくれたことが大きな思い出です。」と語る。現在の職場でも、家が倒壊したため仮設住宅や施設が退院先となることから不安を持つ患者さんが多く、看護師を含め、周囲がその人の心を支えることが本当に大切なんだと話してくれました。

在学時代に看護学科の授業で好きだったのは「実習」。とくに急性期実習では手術を受ける患者さんを受け持ち、術前から術後までの看護について学んだことで、外科勤務を目指すきっかけとなった。今でも、わからないことがあって教科書を開くとき、お世話になった先生方の顔が浮かぶという。

「看護をやっているとよかったと思うことは、患者さんにありがとうと言われたとき。術後リハビリで元気になっていく患者さんからいただくその一言に、大きなやりがいを感じます。」そう話してくれた熊谷さんは、感謝の思いを胸に患者さんひとりひとりと向き合っており、その人が必要とする看護をみつけて実践していける看護師を目指し、日々活躍しています。



現在の職場での熊谷さん



学生の頃のよさこい仲間と



看護学科時代、同級生と